

# 高齢者の余暇活動の場における サービス圏域の広がりを利用者の評価

山田 稔<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 茨城大学准教授 工学部都市システム工学科 (〒316-8511 茨城県日立市中成沢町4-12-1)  
E-mail: yamada@mx.ibaraki.ac.jp

外出が滞りがちな高齢者に対し、余暇活動の場を提供することで外出を促し、生活を活性化させ、介護の必要性を抑制することの有用性が言われている。その多くは、場における交流が重視され、施設集約型のサービスとなっている。

高齢者の趣味・趣向は多岐に及ぶため、提供される内容を充実させようとする、相当の利用者が見込まれるようサービス圏域を広く設定することが必要となる。そこにモビリティの確保の重要性が指摘される。

本研究は、茨城県日立市において実施した利用者の意識調査の結果を用い、小学校区圏域のサービスと全市域対象のものとの比較から、サービスの多様性や圏域の広さ自体が持つ重要性を示すものである。

**Key Words :** *elderly peoples, leisure service, service area*

## 1. はじめに

外出が滞りがちな高齢者に対し、余暇活動の場を提供することで外出を促し、生活を活性化させ、介護の必要性を抑制することの有用性が言われている。しかし、余暇活動は、参加者の個人的な趣向や経験・能力によってその具体的な内容に対する関心の度合いに大きな違いが生じると考えられる。そこで、このような場を提供することを考える際には、利用者のニーズに即しつつも、その多様性を確保することが重要と考えられる。

しかし、多様なサービスを提供するためには、活動において指導的な存在となるスタッフに関しても、多様なニーズに対応できる人材の確保が課題となる。さらに、運営の経費の面や、活動の場における参加者間の交流の効果も考えようとする、それぞれのテーマに対してある程度の参加者の数を集めることが重要となる。多様なサービスを提供するためには、サービスエリアを広く設定し、スタッフ、参加者ともにその母集団となる人口規模を大きく設定することの必然性が高い。

本稿では、このような視点に立ち、相対的にサービスエリアの広がりによって異なる2種類を取り上げ、その実態を比較することにより、両者の現状における役割分担の実情を明らかにする。

さらに、潜在的な利用者層に対する意識調査の結果か

ら、サービスの質と交通アクセスに対する相対的な意識の違いを分析することにより、モビリティ確保の重要性を考察するものである。

## 2. 研究対象とするサービス

本研究では、サービスエリアの広さに違いがある高齢者向けの余暇活動として、小学校区単位で開催されているもの、および市全域を対象として開催されているものの2レベルを取り上げ、両者の比較を行うこととする。

このような条件のもと、ケーススタディとして茨城県日立市をとりあげ、まず、そこで比較的参加者が多い高齢者向け余暇活動の開催状況について情報を収集した。その結果、次に述べるように、小学校区単位での開催としては健康体操や高齢者サロンを、市全域を対象としたものとして生涯学習講座を対象とすることとした。

さらに実態のデータや調査協力の関係から、前者については小学校区ごとに設置されているコミュニティ推進会や学区社協が主催するものを、また後者については多様な生涯学習を推進するため行政が設立した、関連の住民団体、各種団体、企業、個人等が連携するための組織「ひたち生き生き百年塾」が主催するものを取り上げた。いずれも、行政の生涯学習担当部局、地域コミュニティ関連部局、および福祉部局からの補助や委託を受けて事

業を実施しているものである。

### 3. 小学校区単位での活動の実態と課題

#### (1) 活動の内容

市側の統計資料と、主催者であるコミュニティ推進会や学区社協の活動が活発であるH学区とS学区で主催者にヒアリングを行って実態を把握することとした。

いずれにおいても、延べ参加人数の多いものとして、**表-1**に示すような、「健康クラブ」と「ふれあいサロン」があることがわかった。

前者は、介護予防サービスの一環として位置づけられており、身体的に生活機能が低下している高齢者を対象とした健康づくりを目的とするものである。内容としては、健康チェック、健康体操・指体操・ウォーキング、軽度のレクリエーション・スポーツ、日帰り旅行などから成っているが、その多くは室内での活動である。利用料は基本的に無料で、食事代や材料費など若干の実費がかかる場合がある。いずれの地区においても各学区内の1箇所毎月2回開催されている。

後者は、外出機会の少ない在宅の高齢者を対象に、地域でのふれあいや生きがいがづくり、仲間づくりを目的に開催されているものである。内容としては、食事会、地域の人々との交流、趣味・レクリエーション活動などであるが、健康体操を行っているケースもある。地域が独自に工夫した内容を設定しており、必要に応じて利用料を徴収する場合もある。開催場所・回数は学区によって異なっており、「健康クラブ」よりも開催場所が多いのが一般的で小学校区当り1～7箇所(平均で2.7箇所)で開催されており、それぞれ月1～2回程度の開催となっている。

#### (2) 利用者の実態

市内全学区平均の利用者数は、1箇所・開催あたり約15名となっているが、**表-1**に示した2学区では参加が活発であり、平均21名となっている。

2学区で行った計66名の参加者に対するアンケートの結果より、利用者の属性を示す。

年齢は**図-1**のように、80歳以上が6割以上を占めている。性別では、男性9%、女性91%であった。また交通手段は**図-2**のようにほとんどが、徒歩・自転車である。しかし、「健康クラブ」が学区内の1箇所だけでの開催となっているため、徒歩によるアクセスが困難なため車の送迎を利用している人も見られる。

#### (3) 小学校区単位の活動の課題

両学区ともに、本来の潜在的な対象者に比べて参加者数が少ないことを課題としてあげており、具体的には会場までのアクセス手段が徒歩では困難だが家族等での送

表-1 2地区での運営実態の比較

		S地区	H地区
人口		7130	7414
高齢化率		18.2	17.1
ふれあい健康クラブ	開催場所	交流センター	
	開催日	第2,4木曜	第1,3木曜
	開催回数	23	22
	参加者数	659	795
	ボランティア数	317	261
ふれあいサロン	開催場所 開催日	集会所 (第1,3月) 個人宅1 (第2,4月) 個人宅2 (第2火)	交流センター (第2,4木) 集会所1 (毎水) 集会所2 (第2月)
	開催場所数	3	3
	開催回数	52	84
	参加者数	902	1438

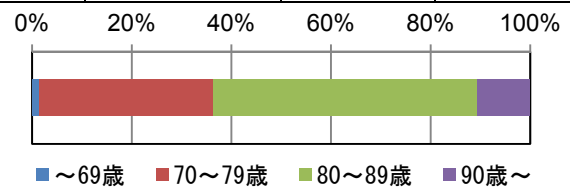


図-1 参加者の年齢構成

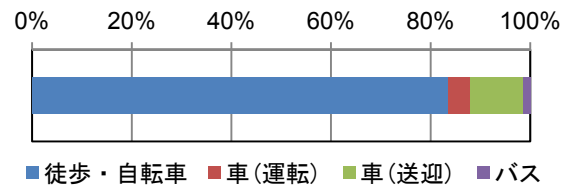


図-2 参加者の交通手段

迎も難しい人が少なくないこと、また、広報・周知が必ずしも十分ではなく、特に活動内容については書面では伝わりにくいと考えられている。

また内容については、参加者の体力・健康状態に差があるため、体操などが簡単すぎるという評価から、難しいという評価までばらついていて、よりきめ細かい対応が望まれるものの、限られたスタッフ・財源では質の向上が用意でないこと、などが指摘された。さらには、「ふれあいサロン」については日頃からの人間関係が影響して、新しい人が参加を敬遠する傾向も少なからずあるようである。

### 4. 市域を対象とした活動の実態

#### (1) 活動の概要

ひたち生き生き百年塾では、毎月4回ほど、講師を招いて「生き生き講座」という講座を開いている。平成22年に実施された講座の参加状況を**表-2**に示す。講座には、はがきや電話、ホームページなどからの応募によって、市内の各地から様々な年代の人々が参加している。活動の情報提供方法としては、全市民を対象に「百年塾

表-2 平成 22 年生き生き講座実施状況

募集講座数	26 講座
成立講座数	20 講座
講座開設期間	平成 22 年 6 月～12 月
総受講者数	205 名 (男 28 ・ 女 177)

ひろば」という情報誌を各家庭に配布している。

## (2) 利用者の実態

平成 22 年度の参加者に対して主催者が実施したアンケート調査結果 167 票の集計によると、年齢構成は図-3 のようになっており、小学校単位のものに比べて年齢層が低いことがわかる。性別は男性 14%、女性 86%であった。アンケートの参加目的についての回答を年齢別に見たものが図-4 であり、年齢による違いが見られる。

## (3) 全市を対象とした活動の課題

主催者、講師へのヒアリングの結果と、同アンケートへの自由記入回答より、以下のような点が指摘された。

- ・ 人間関係を気にして、講座や交流センターのイベントに参加できない人がいる。イベントだけの関係で終わらない場合が少なくないが、それへの評価が参加者によって異なる。
- ・ 外出意欲の低い高齢者への対策として、テーマによっては、主催者や講座講師の努力で解決できる場合があるが、一般に容易ではないとの指摘があった。
- ・ イベントの内容まで周知させることは難しいが、どの家庭にも情報が行き届くようしたい。

## 5. 潜在的利用者層の意識

### (1) アンケート調査の概要

ここまで述べてきた範囲の活動の対象者として、趣味等によるある程度幅のある人間関係の構築の可能性も考えられる50歳以上を対象とし、訪問アンケートにより、この種の余暇活動への参加に関する意識を調査した。調査の概要を表-3に示す。回答者の年齢構成を図-3に示す。性別は、38%が男性、62%が女性であった。

### (2) 参加に際して重視する項目

すでに述べた既存資料およびヒアリングの結果より、参加に際して利用者が考慮するであろう要因を、表-4の5つに大きく分類した。そして、アンケートでその重視の順番を聞いた問の集計結果が図-6である。

イベントの内容が最も重視される傾向にあり、次に自分の健康状態に合うか、次いで、開催場所への交通の順に概ね並んでいると見ることができる。

70 歳未満が約半数含まれる調査での結果であるため、自家用車の利用可能性が比較的高いものと考えられる。

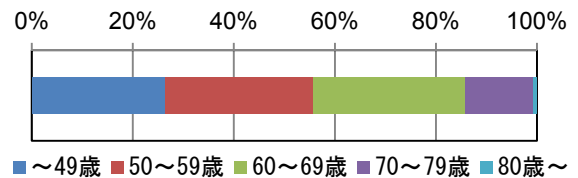


図-3 参加者の年齢構成

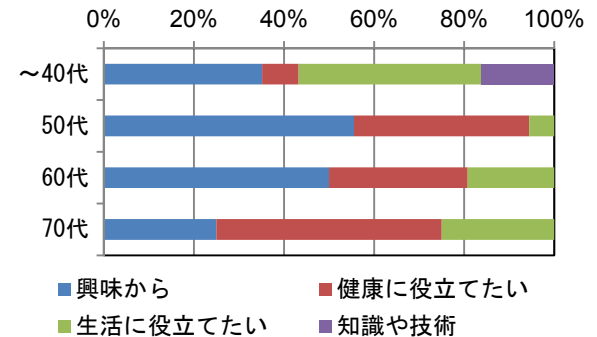


図-4 参加の目的

表-3 訪問アンケート概要

対象地区	日立市内の3小学校区から抽出
対象者	50歳以上の男女
調査項目	回答者の属性と希望するイベントの特徴について
調査方法	訪問配布・訪問回収
配布数	3学区各60部 計180部
有効回収数	168部

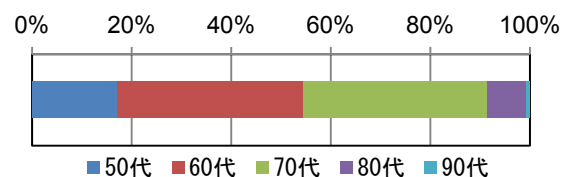


図-5 アンケート回答者の年齢構成

表-4 重視項目の大分類

分類名	説明
新しい交流	参加することによって新たに出来る友人との交流
人間関係	会場で望む、他の参加者との関係
開催場所への交通	開催場所の条件やそこまでの交通手段
イベント内容	参加したいと思えるイベントの内容
健康状態に合う	参加することによって使う健康や体力のレベル

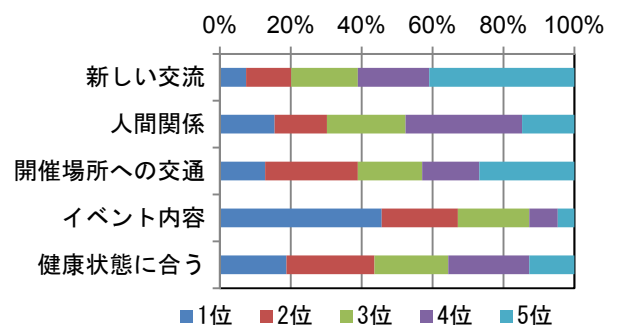


図-6 参加で重視する項目

それでも、交通の要因が 3 番目に重要視されている結果となった。従って、交通の条件によっては、本来の関心の高いイベントの内容や自身の健康状態に適合しているかといった点で満足できない結果となることも想定している回答であると考えられる。

### (3) 属性別の分析

加齢に伴って低下する身体能力に関連する項目として、図-7 に示す 5 項目をアンケートで聞いた。ここではこの属性別が重視する項目に及ぼす影響を分析する。図-7 ~9 が、先の結果で関心が高かった 3 項目について、身体的特性と重視順位の関係を集計したものである。

いずれも身体的特性との関連が見られる。身体的特性が厳しくなるに連れ、「イベント内容」よりも「健康状態に合う」ことの方を重視する傾向が見られる。それと同時に、「開催場所までの交通」についても、身体的特性が厳しい人ほど重視する傾向があることがわかる。

## 6. まとめ

本研究では、余暇活動の場を提供するサービスの現状と、それに対する利用者の選択の際の意識について分析したものである。その結果、利用者意識として、身体的特性が厳しいためにアクセス交通手段に制約が出てくるほど、サービス内容の希望を断念する傾向にあることが示された。その様な人は同時に、サービス内容としては自分の健康状態に合うことを重視する傾向にある。現状では、近隣で健康体操などが実施されていることから、それ自体は利用者の選択特性に合致しているといえる。

しかし、真に外出を促し、生活を活性化させるためには、利用者の趣向との合致や、参加者同士で気の合う人に出会えることが重要であり、狭いサービスエリアを対象とする企画では、それらの可能性も低くなる懸念される。むしろ交通アクセスの懸念無くサービスを選択できる環境が望まれていると考えられる。

**謝辞：** 日立市各学区のコミュニティ推進会の関係者各位、および百年塾事務局には多大な協力をいただいた。とりまとめには元茨城大学計画・交通研究室藁科晴香さんの労によるところが大きい。この場を借り感謝の意を表す。

### 参考文献

- 1) 福永, 山田, 葛西 : 運営方法からみた高齢者向けの地域福祉推進事業への参加者促進に関する研究, 土木学

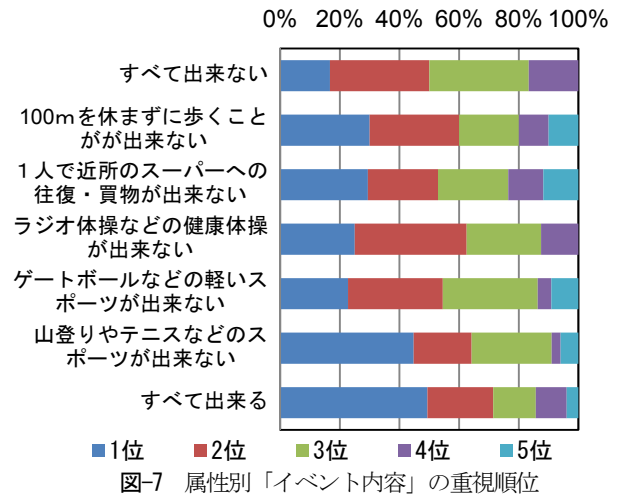


図-7 属性別「イベント内容」の重視順位

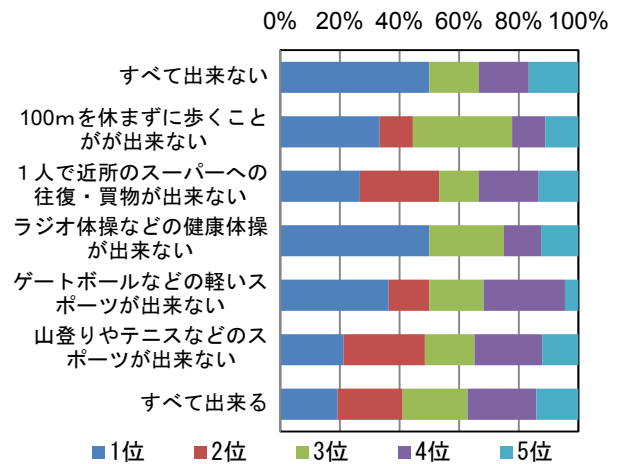


図-8 属性別「健康状態に合う」の重視順位

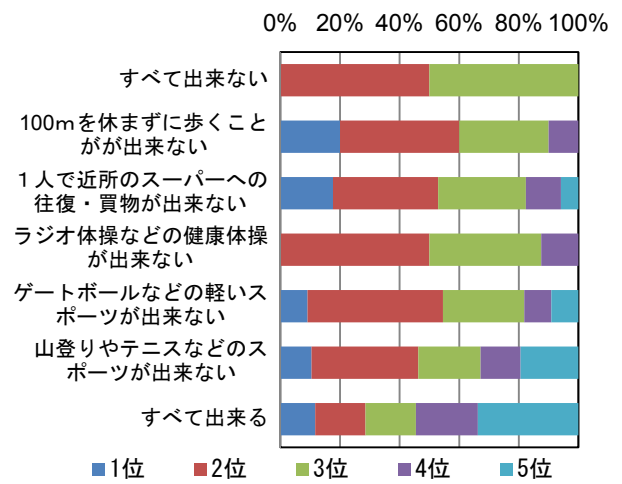


図-9 属性別「開催場所への交通」の重視順位

会第34回関東支部技術研究発表会概要集, pp.IV-66-1 ~2, 2007.3.

(2012.5.7 受付)

## RELATIONSHIP OF THE USER EVALUATION WITH THE EXTENT OF SERVICE AREA OF THE LEISURE SERVICE FOR ELDERLY PEOPLES

Minoru YAMADA